

八日の記には

嗚呼黄昏と曇天と、今や暗然として吾が窓外よりうかゞふ様の何ぞ凄まじきぞや。吾が心頻りに憂ふ。吾が情甚だ悲しむ。

心を熱誠にして神に祈り、舎弟及び父母の安否を聞かじめ給はん事を求む。

と、ある。夕刻の曇天の空の物すごい様子に心おびえ、収二の帰省した後の一人居のさびしさにおそれ、両親の安否を気づかい神に祈っている。

ところが弟が大分から出した手紙が来た。手紙の中は元気がみちみちしている。父の国許からの手紙を戴いた。慈愛と安全が手紙の中にあふれていた。これを見て不安の念も消え去り、

## 国木田独歩の

### 佐伯での生活

(十八)

山内武麟

(賛助会員)

佐伯市城下東町)

即ち熱涙を振ふて神に感謝し奉る。戸外の風止み、春雨悠然として軒をめぐる。と、記してある。

十日の記には初め昨日のことを記してある。

昨日午前、城山に登り、独りで「カーライル」を読み深く考えた。

滔々たる歴史の流れ、流れ／＼て終には終には神の無窮の目的の海に入る可きを思ふ時は、猛然たらざらんと欲すと雖も得ず

と、自省している。しかしどうであろうとも人類は後には絶滅する時がくる。しかし宇宙は亡びないであろう。物質の世界が凡て破滅する時がくる。しかし神は亡びない。神が亡びないなら愛は永遠にある。愛が永遠ならば正義も永遠である。そうであれば人間の只一片の生でも個人は個人として永遠無窮の王国の民となる事が出来る。死が何か、紛々として起る偶然のことが何か、あ自分をしてこの信仰に生かし給え、神よ。

と、永遠の生命を神に祈っている。

昨夜高木正道君から手紙がくる。昨日収二・中桐・徳富の三人に手紙を出す。徳富氏には富永徳磨のことを依頼した。

次に今日の出来ごとを記してある。

今朝、窓をあけて下を見ると、庭先に一通の手紙が落ちていた。ひらいて見ると何者ともわからない者から自分に宛てゝ一通の勧告書を送ってきたのである。その文は次のようである。

別段書き置かないが、その意とするところは、

第一、先生来伯の時、自分のため八分、学生のため二分を務むと言ひしは薄情ならずや。

第二、偏愛あり。

第三、勉強家を益々庇護し不勉強家を遠くらは給金を受けつゝある義務にそむかざるか。

第四、昨日、矢野先生を感慨なしと罵りたる所以は如何……等なり。

記名は山本修吉とあった。

独歩はこれを見て大きな衝撃を受けたであらう。早速富永君を訪うて、山本修吉という者を知らないかと尋ねてみると、知らないと答えた。そこで勧告書のことを話すと、自分が推測した通り、学館生徒の或者の仕事であらうと言う。誰だろうかと問うと、石丸の如きものであらうと云う。自分もそうに違いないと信じ、今夜彼石丸を呼びつけて大いになじった。彼は堅く自分は知らない

という。それで自分が考えていること、志ざしていること、信じていることを告げて、互に誤解しないようにして欲しいと話した。彼も亦承諾した。そしてその外のことを話した。

と、ある。このことはこれで終らないで、これがきっかけになつて石丸たちを中心とする不平分子が、独歩に対して排斥運動を起こすように拡大していったのである。この十日の富永日記を見ると、

(前略) 机にもたれて昨日の日誌を書きつゝある間に国木田師は訪ひ来りぬ。急ぎ取片付て迎へ入れて書齋に入りぬ。師は問ふて曰く芳島に山本修吉なる人ありや否や。と、我知らずと云ひしかば師は苦笑して曰く、余今朝起出て見れば余が寓居の庭に一封余に宛たる書翰なり。山本修吉とは其差出人の姓名なり。余開きて之を見れば之れ余に諫言する書なりき。其内に曰く「君は実に偏愛なり。勉強するものを甚だしく愛し不勉強なるものを甚だしく疎んず、之れ果して俸給を取るものゝ所為となすべきか。君は又我郷出身の矢野氏を罵言せり、君は何が故にかくの如き矢野氏に推されて我地に来りしぞ、其他云々」とありたり。余

は実に驚きたり。余は生れて余り磊落に失するといふ  
譏は受けたることあるも、かゝる陰險などの誹を受け  
たることなし。其の偏愛云々といふ如き実に愚の至り  
ならずや。之れ人情當に然るべき所ならずや。矢野云  
々の如き、余は其様に罵言したることなし。昨日余は  
ナショナルの級生が余りに不勉強なるを責むる語中君  
等は決して矢野先生の如きを模型とすべからず。彼は  
己に過去の人退守の人なればなりといひしことのある  
のみ、余が常に彼等を責むるは只だ余が一点の赤心を  
以てなり。然るに情通ぜず語のみ通ず。悲しむべし、  
然れども現今の教育界の状弊なり。師弟の交りは只だ  
表面的にして情と情と合し、愛と愛と結ぶものに至て  
は殆んど絶無、非常の感慨なる談話ありて後、其誰な  
らんと問ふ。我答へざりしも師は云へり。石丸を除い  
て他に其人あるべからずと。我も石丸が新師に付て不  
平を抱く人なるに誤りなきを告げぬ。

師は曰く若し此書にして館外より来ればよし。若し  
生徒ならば更に慨すべし。石丸の如き欠席勝に不勉強  
極まりながら何を苦んで之をなす。談話は教育の事に  
移り火鉢を叩きて語り合ひぬ（以下略）。

と、ある。

独歩の身の上に思いがけぬ事件が起つたのである。独  
歩は勧告書の一件を石丸の仕業と決めつけ、石丸を呼び  
つけて烈しくなじつたのである。疑をかけられた石丸は  
大いに立腹し、独歩に対する反感を一層深め、今まで以  
上に石丸や石丸を取巻く不平分子との間にいよいよ大き  
な深い溝が出来たのである。

独歩はこの時予測出来なかつたが、この頃鶴谷学館の  
生徒間にはこのような事件が起りそうな心配があつたの  
である。尾間明の書いた「佐伯時代及上京当時の独歩氏」  
と題する独歩に対する思い出を書いた文がある。（雑誌  
「新潮」）の独歩追悼特輯号に所載（国木田独歩全集十  
巻にある）。

その文の中に

佐伯では英学と数学とを受持つて居られた。鶴谷学  
館といふものは生徒数も少なく小さな塾で、丁度その  
時分、二派に分れて居た。一は国木田派といふべきも  
の、一は漢学派で、国木田君はその自派には心服され  
ていた。これは同君が雅量の人たるを証する一逸話で  
あるが、或夜反対派を自宅に呼んで深更まで話したこ

とがある。然しそうして話しはしたが、対手を感服せしむるまで至らなかつた。が後にその反対派の一人は不思議な縁で画報社に入り独歩社時代まで国木田君の部下で働いた。石丸蒼鷹（敏一）といふ人で、今も東京に居ると云うことだ。

この文にあるように、当時の鶴谷学館は生徒が二派に分れていた。独歩を尊敬するもの達でよく勉強し成績のよいもの等の派と、漢学派即ち漢学の教師中島龍一郎の薫陶に従うもの達との二派である。中島はその頃最早や老期に近い頑固一徹な人で、剣道指南も兼ねていたのである。一方独歩の方は年僅か二十三四歳の若輩でありながら教頭として幅をきかせ、その上俸給は月二十五円で当時佐伯では裁判所判事と並ぶ高給取りで、佐伯の名士の一人に数えられていた。このことが癪に障っていたのに違いない。中島は兼任教師で僅かな手当を貰っていたのに過ぎないのである。こんなことから独歩に対して心よく思わず、独歩に反感を持つ生徒たちを蔭から糸を引いていたらしい。その不平分子の一人が独歩の寓居の庭に勧告書を投げ込んだのである。

勧告書に独歩には偏愛が強いとあるが、独歩はこれに對して自分には偏愛はないと言っている。しかし独歩を敬愛する所謂独歩派の者達は始終独歩の寓居に出入りし独歩の同伴をしていた。独歩もこの者達を可愛がっていた。偏愛があると誤解されても無理からぬと思われる。そしてまた独歩の教え方は激しい方で生徒を練り上げていた。殊に不勉強なものには強く当たっていたらしい。教えたところを知らないと言ったら大変で、目をむいて叱ったという。独歩は気性が強く聞かぬ方で負けず嫌いであったから、生徒の方からぶつかって来ないと気に入らず、佐伯の青年は覇気が足らぬとけなしていた。生徒を励ます積りであろうが、これが反対に誤解されて反感を買う原因になったらしい。

徳富蘇峰の独歩評にも、議論好きで傍若無人なところが、先輩から「こましゃくくれた生意気な若者」と評されていた。とある。

独歩が反感を買った原因にもう一つある。それは彼が熱心な基督教信者であったということである。その頃の佐伯には独立した教会堂はなく新屋敷の或民家を借りて仮の教会堂にあて、時々大分から宣教師が来て布教伝道

に当たっていたのである。信者は極く少数で、その少人数の信者が集って讚美歌を歌い祈祷を捧げて互に感話をしてきた。独歩は殆んど毎回出席して感話し、会員を励ましていた。

その頃の佐伯では基督教徒を耶蘇々々と呼んでさげすみ嫌う人が大部分であった。学校の教師でありながら耶蘇である、独歩は町民から白い眼で見られたのは止む得ないことであった。

当時の鶴谷学館の生徒は年下の者は高等小学校を卒業したばかりの十五六歳の者であり、上のもは各々職業を持った二十四五歳の者で、中にはもつと年嵩の者もいたらしい。平均十八九歳の血気盛んな青年たちの集まりであったので、不平不満を押え切れず、そしてその中の一人が火をつけたのである。そしてその火の手はまたたく間に広がり大きくなっていったのである。

この勧告書を投げ込んだ張本人は、実は石丸ではなく藤田連次郎という生徒であったと言われている。この藤田は後に「佐伯新報」という郷土新聞を発刊した。また佐伯町会議員に選出されていた。

また、石丸は名は敏一といい、紫水または蒼鷹と号し

ていた。長じて佐伯高等小学校の教員をしている時、大分県管内の地理歴史を歌い込んだ新体詩を作り、それが広く県下に流行したことがある。その後上京して近事画報社に入社し、独歩の部下として務めたこともある。この石丸が独歩の没後、その追悼文として書いた「佐伯時代の独歩」と題する文がある（独歩全集十卷所載）。この文には佐伯に於ける独歩の生活ぶりを詳細に書いてある。しかしその中に自分が勧告書の張本人と独歩から誤解されてなじられた恨み言は一字も書いてない。その中に独歩が佐伯に着任して生徒に向かって言った言葉の中に「青年諸子、予は諸子の師たるがために来たのではない」と言ったと記してある。独歩が佐伯に来たのは自分の生活の爲めに来たのに相違ないが、勧告書にあるように「自分のために八分、学生のために二分」と言うのとはその趣旨が大きく異なる。独歩は生徒と共に仲よく勉強しようとする生徒を励ましたのである。

このように勧告書の張本人を石丸と決めつけて烈しくなじったことから、反感組の反感を益々加え事件は大きくなっていったのである。